

2. 京田辺市史の文書調査

東 昇

1. 概要

京田辺市では、2014年度から歴史資料調査を開始し、2017年度より市史編さん事業を実施している。この事業は、京田辺市との連携協定のもと、京都府立大学文学部歴史学科が協力し、多くの教員、院生、学生が参加して各種調査を進めている。

2024年度は、文化情報学研究室を中心に文書調査に参加し、近世文書の調査・分析や近世史執筆内容検討会への参画など、多岐にわたる活動がおこなわれた。

調査参加者は、東昇（教員）、竹中友里代、山田洋一（以上特任講師）、小島慧音、島村朱音（以上4回生）である。

2. 内容

中世・近世部会の部会員および市史編さん室職員による調査・研究報告をおこなう近世史執筆内容検討会は、2019年11月より実施され、これまでに24回開催されている。本年度は、以下のように各文書・現地調査で判明した成果を報告し、資料編の掲載候補の選定をおこなった。

中川博勝「勘定帳をめぐる村方騒動」

東昇「明和7・8年大干魃—オーロラとおかげ参り—」

山田洋一「市史本文編「第1章近世の成立と領主支配」の基礎的用語の確認」

松本勇介（市史編さん室）「『京田辺市史資料編第2巻中世・近世資料』について」

2024年1月22日、東が「明和7・8年大干魃—オーロラとおかげ参り—」をテーマに報告をおこなった。本報告では、山本村庄屋文書を基に、明和7・8年（1770・1771）に発生した大干魃の被害状況について、京都との比較を通じて確認がおこなわれた。さらに、明和7年7月28日に発生したオーロラの概要を紹介した。このオーロラは、山本村から北の京都あたりの空が赤く染まり、大火と見間違えられるほどの異常な光景として記録されている。筋状の光が立ち、火の雨が降るかのようにみえたため、干魃の陽気が凝ったものと噂されるなど、当時の人々の驚きや解釈が記されていた。全国的にも観測されたこのオーロラの記録は、近世における稀少な気象現象を示すとともに、自然現象に対する社会的認識を理解する上で貴重な史料といえる。

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第11号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

発行日 2025年3月31日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2
